

にんにくのモザイク病(病原の追加)

令和元年5月～6月に、空知、石狩、檜山、上川、オホーツク、十勝地方のにんにくほ場で、にんにくの葉にモザイク症状、黄色条斑や奇形などが認められた。罹病葉からアレキシウイルス属検出プライマーを用いてRT-PCR法によるウイルス検出を行ったところ、同属特異的遺伝子の増幅が認められた。得られた遺伝子増幅産物の遺伝子配列を解析した結果、増幅した遺伝子4種のうち1種は、にんにくのモザイク病の病原として知られているニンニクCウイルス (*Garlic virus C* 旧名 *Garlic mite-borne mosaic virus*) とほぼ一致した。他の3種は、ニンニクAウイルス、ニンニクBウイルス、ニンニクDウイルスで同属内での混合感染も認められた。ニンニクCウイルスは、母球伝染の他、チューリップサビダニにより媒介されることが知られている。モザイク病の病原として道内既発生のリーキ黄色条斑ウイルスやタマネギ萎縮ウイルスが知られており、多くの場合それらと混合感染していた。

(花野菜セ・上川農試・ホクサン(株)・北海道大学・空知農業改良普及センター中空知支所・石狩農業改良普及センター本所・檜山農業改良普及センター本所・上川農業改良普及センター富良野支所・網走農業改良普及センター本所・十勝農業改良普及センター十勝西部支所)



にんにくのモザイク病 (左: 発病株、右: 葉の症状) (花野菜セ 佐々木 原図)